

日本の教育史に残るであろう1980年

〜教育から自由が奪われていくの抗い続けた人〜

加印いろえんぴつ 岸本ひとみ

○クルクル変わる教育政策

私事ながら、長女は1984年生まれ、次女は1987年生まれです。子どもたちが小学校に入学する頃には、生活科が生まれていました。アサガオに手紙を書くような非科学的な実践がもてはやされました。そして、中学校に入学する頃には、総合的な学習が導入されました。追りたいテーマごとにグループ学習を進めるために、ずいぶん親子で振り回されました。図書館、インターネット検索（当時はまだ珍しかったの）など……。それができる子どもたちはいいけれど、できない子どもはいいたい教室でどんな気持ちでいるのだろうか、とても心配になったものです。

そう、わが子たちは「ゆとり世代」なのです。生活科から総合的な学習の導入へと突き進む、バタバタした教育情勢を見ていて、このままではダメだと考えた私は、家

庭塾を6年間続けました。暗記と反復練習を軽視することに抗って、毎日学習すること、読書週間、独習ができること、をわが子には求めました。

そして、文部省から文科省への移り変わりの中で、学力低下が話題となり、百マスブームがやってきました。つい数年前まで、総合的な学習をもてはやしていた人たちが、今度は百マス計算の実践を始める姿を見て、呆れたのは私だけではないでしょう。マス計算自体は、使い方によっては学習集団として子どもたちを高めることもできますし、間違えば集団を崩壊させてしまう危険もはらんでいます。

ブームの中で、数年前までは、総合的な学習のすばらしさを説いていた職場の先輩が、マス計算を始めていて、そのやり方が間違っていた時には、かなり人間不信になりました。

この振れ幅の大きさに危うさを感じていたところへ、学力テストが導入され、次には道徳の教科化がやってきました。

平成というのは、たった三十年間で、これだけ教育政策の振れ幅が大きかった時代だったということです。そういう意味で、長期的な展望なしに振れ幅だけが大きかったと、教育史に残るだろうと考えています。

○多忙化で考える意欲が萎える

この振れ幅の大きかった教育政策に合わせて、180度違う教育実践が文科省推奨モデルとして提示されました。そのことによつて、なかなか方向転換できずに、多忙化だけが進みました。子どもの指導に関することは、少しの成果が出るのにとても時間がかかります。にもかかわらず、まったく逆の指示が出てきたために、それまでの「ゆとり」をたたみ、「学力」を通り、「道徳」にたどり着くのに、教員はエネルギーを消耗してしまったのだと考えます。

保護者対応の難しさも、これに拍車をかけることになりました。特に、教員の年齢構成がいびつな都市部の学校では、30代

以下の教員がほぼ全員というような学校も出てきました。保護者よりも若い教員の場合、どうしても対応が難しくなってしまうのは仕方ないことです。

忙しすぎると、人間は考えることができなくなります。何だか変だなと、感じていても、立ち止まることすら許されないような、息苦しさを感じます。

○自由度が低くなった

この三十年を見ていて、痛切に感じていること。教育実践の自由度が狭まってきていることです。ブームがやってきたら、どの先生も同じようにそれに乗っかっていかざるを得ないような空気が、学校現場をおおっています。

教育とは、本来、子どもの実態に合わせて、実践を進めていくものですから、指導書の通りに進まなくても、それは当たり前。そんな感覚やセンスを持っていても、周りの声に押しつぶされそうになってしまいません。どんな教科でも、子どもたちの実態に沿った教材と進め方をしなければ、教育効果は薄いはずなのに、くねばならない、と

付度することがあまりにも多くなってしまっていないませんか。

いじめ問題や、学びからの逃走、不登校、それが重層的になった学級崩壊は、どれも子どもたちから出ている、重大なサインで、根っこは同じではないでしょうか。今の学校や教育システム、指導要領偏重は制度疲労をしてきていると考えれば、つじつまが合うのです。

○学力実践で元気に

一方、学力研の実践は、

- ①子どもたちの実態調査
- ②その分析と指導方法の検討
- ③スモールステップでの修正
- ④子どもの変容

という進み方が基本形です。菊池省三先生の「ほめ言葉のシャワー」からヒントを得たり、愛知教育大の志水廣先生から教えていただいたりと、他の研究会の実践も採り入れ、研究者の方の講演を聞いて教師も学びながら、いろいろな方法で、子どもたち

にアプローチしています。その中から、それぞれのクラスに合ったものを選んで、自分流にアレンジして子どもたちに提示しています。

子どもに基礎的な学力を身につけさせることは、保護者の大きな願いでもあります。また、授業の中で、お互いに高め合うことで、子どもたちの連帯感も生まれます。今、学校、それも教室の中でしか学べないことは、集団で学習することの素晴らしさです。友だちの意見に耳を傾けて、それについて考えたり、論じたりすることで、人間関係も良好になっていくはずですよ。

そんな経験をした子どもたちは、他者を大事にするでしょうし、自己否定もしないと思うのです。おまけに、学力がついたと実感させることもできるのであれば、一挙両得ではないでしょうか。

今の学校では、修正や仕切り直しがたいへん難しいことは、百も承知です。それでも、学ぶことでそれをカバーしてほしい、その学ぶ場が、学力研であってほしいというのが、私の願いです。